特別インタビュー

いまも思い出に残る『聖子の馬』と過ごした日々
地方競馬が低迷の時代に経営健全化に尽力

橋本 聖子氏
（参議院議員・自民党競馬推進議員連盟会長）

自身がオリンピアン出身である橋本聖子・参議院議員は、JOC（日本オリンピック委員会）会長としての活躍が広く知られているが、実家がマルゼンスキーで有名な牧場とあって、競馬にも造詣が深く、自民党競馬推進議員連盟の会長も務めている。疲弊した地方競馬の立て直しや、難しい判断を迫られたコロナ禍での競馬開催など、競馬ファンとしての視点も持ちながら、常に現場で働く人たちに寄り添い、多くの実績を残してきた。根底には馬に対する深い愛情があり、「馬産地の応援団長」的な存在といえる。そんな橋本氏に馬とのエピソードや、「午年」の抱負を伺った。

マルゼンスキーの無念

――ご実家はマルゼンスキーで有名な牧場。馬が身近にいるのが当たり前の環境でしたが、先生自身、特に印象に残っている馬とのエピソードはありますか。

私の幼少期にはサラブレッドは勿論ですが、重種馬、道産子、ポニーもおりまして、馬に囲まれ、友達がポニーという生活を送っていました。家族から『聖子の馬』と言われたポニーと過ごした思い出は今でも昨日のことのように鮮明に覚えています。

カイバ（餌）を食べさせ水を飲ませ、ブラッシングをして乗馬をするというのが毎日の日課で、よい思い出です。

――いわゆる「持込馬」（国外で種牡馬と交配された母馬が仔馬を日本で産んだケース）だったため、当時の規定によりダービー出走が叶わなかったマルゼンスキーは、いまもオールドファンの記憶に刻まれる名馬です。マルゼンスキーについては何か思い出がありますか。

マルゼンスキーの誕生は、橋本牧場の命運を分けると言っても過言ではないほど期待をされていました。その緊張感や期待の大きさは、子供の私もひしひしと感じていました。

マルゼンスキーの誕生は1974年5月19日でした。私が小学4年生になった時ですが、ちょうど腎臓病で入院中でした。見舞いに来てくれた両親がとても嬉しそうに元気な男馬が産まれた！と喜んでいました。それを聞いた私も思わず『やったぁ～』と叫んで、小躍りしたのを覚えています。

しかし、その後、ダービーに出走できないことを聞かされ、悔しい思いもしました。当時の中野渡清一騎手が『大外からでいい、邪魔しないし、賞金もいらないから走らせて欲しい』と言っていました。その時は、子供ながらに、どうしてルールを変えることができないのだろうかと思ったものです。

草競馬でジョッキー乗り

――小さい頃は乗馬体験がおありだそうですが、その後、アスリートとして役に立った部分はありますか。馬術の選手で五輪、と思われたことはなかったのですか。

小さい頃は毎日のように『聖子の馬』で乗馬をしていました。小学1年

〈はしもと　せいこ〉1964年、安平町早来出身。7回オリンピック出場を果たし、アルベールビル大会ではスピードスケートで銅メダル獲得した。富士急行株式会社での勤務を経て、1995年に参議院議員初当選。当選6回。外務副大臣、東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣、内閣府特命担当大臣（男女共同参画）、女性活躍担当大臣、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会会長などの要職を歴任し、現在は党両院議員総会長を務めている。

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）